

# Que Será, Será

VOL.4

1996

SPRING



廣江 武 撮影

## そよ風の贈り物

―プールのスト効果―

久診庵 貝谷久宣

拓也は今日の会議のことを気にかけつつ通勤快速に乗った。車内は中等度の混雑でゴールデンウィークも過ぎ女性乗客には薄着が目立った。見るともなく窓の外の景色をながめる拓也の頭の中では午後開かれる企画会議がすでに始まっていた。あの頑固頭の部長とまたやり合わなければならぬという考えに拓也の気分は少し重くなっていた。

電車が次の駅に停車し扉が開くと、車外から初夏のかすかなそよ風が吹き込んだ。その瞬間、それまで拓也を捉えていた多少減入った気分が突然払拭された。茫洋とした何となく気恥ずかしい情感が湧き上がり、それはすぐさま胸をときめかすかすかな幸福感に変化していった。その小さな快感はどどんと揺るがり、ついには希望に満ちた歓喜にまで高まろうとしていた。この近年経験したことのないさわやかな感動の源は何だろうか？それはあのそよ風に乗ってきた香りであることには間違いない。ただの香水の匂いではない。プラスアルファの何かが背後に隠れている。

拓也のこの快感はその香りと関係はあるが、それ自体によるものでは決してない。香りそのものによる快感の感覚を十倍も百倍も凌駕していた。一体何故？第二の疑問が生じた。拓也の前頭脳の神経細胞が次々に発火し、三八年間の記憶ファイルを一掃し、三八年間の記憶ファイルを一掃し、三八年間の記憶ファイルをスキャンニングし始めた。彼の生体コンピュータはこの快感に対応するキイ・ワードを探し始めた。拓也を乗せた快速電車は鉄橋を渡り終えまもなく次の停車駅に到着しようとしていた。拓也にとつてたいへん長い努力の時間が過ぎた。やっこのことでキイ・ワードが意識の紙にプリントアウトされてきた。それは、中学校の運動会だ。拓也は男女混合リレーの二番走者としてバトンを受け取るうと前走者の到着を待っていた。そこに勢い余った前走者ブルマ姿の奈美恵が衝突してきた。彼女の胸の膨らみを背中いっぱい受けとめた瞬間の……あつ！あの匂いだっただの。

五月待つ花橘の香をかげば

昔の人の 袖の香ぞする

(古今和歌集)